

本よみくり堂

井上ひさしの

読書眼鏡

わたしたちは何度となく「戦後」という鍵言葉を使って過去を考えたり、未来について議論をしたりしています。ところが、この「戦後」の意味内容をきちんと定義していないので、甲さんの戦後は「戦前戦中よりずっとマシな時代」であり、乙さんの戦後は「ウソとテラメで塗り固められた虚妄な時代」であり、そこで当然、議論に大混乱が発生します。混乱ならま

だよいが、たいていが喧嘩で終わってしまう。そしてたがい背を向け合い、仲間うちだけで通用する議論をして、てんでに盛り上がっている。これではまともな議論や未来を切り拓く議論が成立しません。なんとという時間と知力の浪費だったのでしょうか。

この事情は、「民主」「愛国」「近代」「市民」「平和」「戦争」「ナショナリズム」「私」「公」といった鍵言葉

群においても同じであって、それぞれが自分勝手な意味を盛り込んで使うので、それを巡る議論は一見、賑やかに見



考えるときになくはならぬ基本語彙なのです。基本語彙を手前勝手に使っているのですから、過去も分からないままです。その過去を受け継いでいる現在の意味もアヤフヤ、ましてや、そんな曖昧な言葉は何万何億と積み重ねたところで未来なぞ見えてく

えば日本語ブームという形で表れているのではないかと……日本人のだれもが心のどこかでそう感じているところへ、小熊英一という新進気鋭の思想家が、『人民主』と『愛国V』(新曜社)という題名の大労作をひっつけて登場しました。危機におちいった杉

不毛な言葉争いに終止符

えていて、ほとんどが不毛に終わってしまう。議論は憎しみの他は、なにも生み出さないのが常でした。

しかも困ったことに、これらの言葉群は、時代や社会を

るはずがない。わたしたちがいま置かれている閉塞状況は、じつはこの基本語彙のナマクラな使い方が招いたものではなかったか。そのことに対する無意識の反省が、たと

作少年のときへ駆けつける鞍馬天狗のように颯爽と。

原稿用紙(五〇〇枚)を存分に活用しながら、著者は前述の基本語彙の使われ方を明らかにして行きます……と書く

と、なんだか七面倒な書物のようですが、手にとっていただけは、どなたにもお分かりいただけるように、文章は端正かつ正確でありながら滋味にあふれた細部を乗せて読みやすく、その上、実例が豊富で、あきることありません。

なによりも面白いのは、全編の各語にちりはめられた、戦後思想を牽引した人々(丸山眞実、竹内好、吉本隆明、江藤淳、鶴見俊輔、小田実)の小さな伝記群です。これらの人たちの小伝を拾い読みするだけでも充分にモトがとれます。さらに牽引者たちの伝記が、じつは同じ世代の何百万もの人たちの伝記としても通用する仕掛けは、見事

* 題字・似顔絵 唐沢 なをき